

名聞利養の心を凝視して

人間がもし「人に知られよう、名を挙げよう」という欲を超えることができたなら、人間の生きることはとても楽になり、その肩の荷はとても軽くなる。

仏教では、人間を五欲の塊だという。その中の名利欲は、どんな聖僧の衣の下にもついて廻る。それほど相を見せない悪魔なのである。

名利欲が醜いものであるといえば、そしてまた名誉にならぬと思えば、きつぱり精進することを止めてしまう。それは大変なまちがいである。自己の内面を不斷に培うことは、人間に与えられた特権であり、喜びである。

心内に巢食う煩惱が何と言おうと、有名にならなくてもいいのだ。名高くならなくてもいいのだ。ただ真実なるものを求め、真実なるものに求められ、真実を念じて一歩一歩、精進してゆくことが許されてあるだけだ。

われわれは凡夫である。凡夫とは『一念多念証文』に曰く。

「凡夫というは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおおく、瞋り腹だち、そねみねたむ心多く、問なくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらずきえず……」

過去もそれであつた。現在もそれであり、未来もまたそれである。油断すれば、現前脚下は恐るべき三悪の火口である。

ある時、親鸞聖人が、黒谷の法然上人の禅房へお参りの時、一人の修行者が、「京中に八宗兼学の名誉まします、智慧第一の聖人の御房を知つていられるか。」とたずねた。そこで一諸に吉水の法然上人の処に行かれた。修行者は招かれて法然上人の前に出た。二人はしばらく無言でにらみ合つていられたが、上人は口を開かれた。

「御房は何処の人ぞ、また何の用ありて来れるぞや。」

「我はこれ鎮西の者なり、求法のため華洛に上る。よて推参つかまつるものなり。」

「求法とは、何の法を求むるぞや。」

「念仏の法を求む。」

「念仏は唐土の念仏か、日本の念仏か。」

「唐土の念仏を求むるなり。」

「さては善導大師の御弟子にこそあるなれ。」

こうした問答がかわされた。その時修行者は懐よりつま硯をとり出して二字を書いてささげて弟子入門の礼をとった。これが鎮西の聖光房である。彼は鎮西で思つた。

「洛には智慧第一と称する聖人がいられるそうだが、大したことはあるまい。速かに上洛して一問答しよう。もし負けたら弟子になろう。もし勝ったら弟子にしてやろう。」

とその腹が法然上人に見える。

そこでかの問答があつたのだが、「上人をわが弟子とすること、梯子をかけても及ばない。」

と思つたので師資の礼をなしたのである。

それから二、三年たつて、聖光房は「本国が恋しくなりましたからお暇を頂きませ。」とて御前を去り、門を出ようとした。すると上人は言われた。

「修行者が髻を切らで行くとは、惜しいことだ。」

そのお声が耳に入ったので、帰つて来て曰く

「聖光は出家得度して歳久しいことであります。然るに髻を切らぬよし仰せをこうむる。不審至極であります。この仰せ耳に留るによりて路を行くことも出来ませぬ。事の次第を承りわきまえんがために帰りました。」と言つた。その時上人は

「法師には二つの髻がある。いわゆる、勝他、利養、名聞がこれである。この三ヶ年があいだ、源空が述ぶる所の法門を記し集めて身に持つてゐる。本国に下りて人を虐げんとするこそ勝他ではないか。それにつけて善き学者といわれようと思う。これ名聞をねがうのである。よりて信者門徒を多く取ろうとのぞむこと、しよせん利養のためである。この三つの髻を剃りすてねば法師といいたがたい。よつて左様申したのじゃ。」

と言われたので、聖光房は改悔の色をあらわし、笈おひの中から書き納めたものをみな捨て、暇ひま申して出て行つたが、まだ余りがあつたのか、後、仰せでない諸行往生をとなえはじめた。悲しむべきである。

これは有名な『口伝鈔』の話であるが、深く教えられる物語である。

人をしのぎ、人よりもすぐれてやろうとするのが勝他、賢い人だと言われたのが名聞、これによつて身を安樂に暮したいのが利養である。その心の前には如来の法門²は閉ざされる。親鸞聖人が吉水に下られた動機の中には、赤き一点の求道心、菩提心よりほか何ものもなかつた。果してわれ等にこの三つの髻がないであろうか。

聖人の末流は皆無であつて、聖光房の末孫ばかりではあるまいか。

まことに仏を聞くものは仏心である。仏心の廻向なくして、仏を真に聞くことが出来るようか。南無とたのみ、南無と信じ、南無と聞く機は阿弥陀仏と機法一体である。仏心である。

勝他や、名聞や、利養心がどうして大法を聞き得ようぞ。

聖光房は、悲しくも、内心に動くこの三つの我慢を見ることが出来なかつた。しかるに聖人は、

「名利の大山に迷惑して……恥づべし傷むべし矣」

「是非しらず、邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり。」

と、自己内心に巣くう悪魔の正体を智慧光に照被され、つきとめて念仏していられたのである。如来真実の前に、静かに我等の心中を投げ出さう。我等はしよせん凡夫である。聖徳太子は、

「我れ必ずしも聖に非ず。彼れ必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。」

と仰せられて、凡夫道を打ち建てんとせられた。

「非凡なる人のごとくにふるまへる、後のさびしきは、何にかたぐへむ。」啄木

幾度かくくり返されるさびしきである。心すべきである。

大衆開放のために勇ましく立つことも困難であろうが、病める同胞一人のために、名もなく人知れず苦闘することは、もつと至難である。

人は名利の子なるが故に、利己的なるが故に、「馬鹿らしい」と思う心と戦うことほども、容易ではない。

名聞利養の心がものを言う時、それが生命となる時、本質的には仏法はなくなる。されば吉崎に御坊を建てられた蓮如上人は、

「念仏の信心を決定して、極楽の往生を遂げんと思はざらん人々は、何しにこの在所へ来集せんこと、かなふべからざる由の成敗を加へ畢りぬ。是れ偏に名聞利養を本とせず、たゞ後生菩提をことゝするが故なり。」(御文章の一ノ八)

と仰せられた。念仏の道場は、名聞利養の邪路であつてはならない。如来のみの輝きたもう世界であつて、名聞利養を生命とするあさましい凡夫の救われるところではなくてはならない。

如来の智慧によつて、名聞利養の心が、あさましくも恥ずべき煩惱の相であることがわかる時、生きることの荷物を軽くして頂くであろう。

百喻経の中に「獼猴把豆喩」と言うのがある。昔一匹の獼猴がおつた。一握りの豆を持つていたが、誤つて一粒の豆を大地に落したので、その一粒を拾い取ろうと思つて、手の中の豆を捨ててしまった。いまだ一粒も拾わない先きに鶏鴨が食いつくしてしまつたと言うのである。凡夫の出家がその通りで、初め一戒を毀し、懺悔することが出来ない。悔いないが故に放逸無漸が滋くなつて一切を捨てると言うのである。

一粒の豆を得ようとして、すべてを捨ててはならない。

仏智の前に一切の不純を清算して、一生求道不退の精進を持続すべし。されば我等の本領に曰く

「毀誉褒貶に動ずるなかれ。名利に迷惑するなかれ。

逆境に失意するなかれ、順境に驕るべからず。

念仏一道に精進せよ。」

毀誉褒貶とは、ほめられたり、くさされたりすること。毀誉褒貶に動ずるなかれとは、毀誉褒貶に動く煩惱を凝視して念仏に帰れとのこと、名利に迷惑すなどは、名利に迷う心を凝視めて念仏に帰れとのこと、逆境に失意すなどは、逆境に会えば、失望し落胆して暗くなり、瞋恚の心のおこるを凝視めて念仏道に帰れとのこと、順境に騎るなどは、順境にはニコニコとして笑に入る貪欲の水の河を凝視して念仏に帰れとの意である。